



巻頭言

# 時代の潮流から地域の明日を探る

理事長 細野 武司

グローバル化、IT革命、地球環境問題、資源・食糧の制約、これらは21世紀を通して全世界を巻き込みながら流れる大きな潮流である。わが国では、少子高齢化がこれに加わって、複雑な環境をつくりだしている。このような複雑で先行き不透明な状況下で、われわれが住む東北地域は、将来に向かって一体どの方向を向いて、何をしていけばよいのだろうか。

いつの時代も、その時代の現実課題について英知を集め、それを乗り越える努力をし、地域の振興や発展につなげてきた。しかし、複雑かつ先行き不透明な時代になった今、単なる現状課題への対応では地域の継続的な発展をもたらすことがなかなか難しいといわざるを得ない。なぜなら、その姿勢からは将来の自分を捉えきれず、目標が見えないからである。また現状の延長では、飛躍の機会が無く、大きな意味で現状から脱することが出来ないからである。これからの時代は、将来を大胆に展望し、視点を明確にして現実を捉えていくという姿勢が大事になってくる。その意味では、21世紀の大きな流れに任せるのではなく、世の中が動いていくその本質を見抜き、将来の飛躍に繋がる展望とその視点探しという作業に取り掛かる必要がある。それは同時に、東北地域の持つ普遍的な価値や資源性あるいは比較優位を明らかにすることでもある。

さて、この流れを東北地域はどのように捉えていけるのだろうか。断片的にはあるが見てみよう。

グローバル化は、ヒト、モノ、カネ、情報が世界を駆け巡ることで経済的発展や格差を生じさせる。グローバル化のなかで地域社会が発展していくということは、少なくともその地域の有する比較優位性やその地域独特の個性、特性をうまく活かしていくことであろう。その点で、グローバル化が進む時代の流れの中で、われわれ東北はもう一度自らの資質を見つめ直してみる必要がある。

ひとつには、世界の中で経済発展の道を歩み始めた東アジア、とくに北東アジアやロシアとの地政学的な関係のなかで、東北地域が有する技術、人材、研究開発機能など、ものづくり力を展望してみることである。

昨今、東北地域において自動車産業が世界を視野に動き出そうとしていることは、まさに、こうした見方の中に納まるのではないだろうか。

もうひとつは、世界が動いていくなかで東北の個性、特性、例えば、日本的風土、文化、自然資源、農産物などを国際的な視野からその普遍的な価値を再発見していくことである。そして、それを情報として発信し、ヒト、モノの交流拡大にもつなげていくことで展望を開いていけるのではないだろうか。

一方、地球温暖化の進行は、経済産業活動から国民一人一人の生活にいたるまで、環境の制約がある時代に入ることを予告している。また、世界的規模でのエネルギーなどの資源や、食糧の高騰は、基本的には将来の不足を見越した動きであり、これも同じように21世紀の経済社会の制約条件になってくる。こうした制約を克服していくため、今後経済社会は、省エネルギー・省資源型、循環型、自立分散型、自給重視型へと大きく舵を切っていくこととなる。

こうしたなかで、環境や資源エネルギー、食糧から東北を見直すことは、東北の特色を打ち出していくうえで重要な足がかりとなる。農業と林業の分野で見よう。豊富な水資源と全国の2割を占める耕地面積、4分の1の水田を有し、耕種農業と畜産業の連携による循環型農業がバランスよく営まれている東北は、日本の食料自給率向上の鍵を握っている。遊休農地の活用や山間地の農地の効率的な活用として、バイオ燃料や飼料の供給の可能性が開けるのか期待がかかる。農地の集約化や規模拡大、法人化が進み、アグリビジネスが多様に展開され、安全、安心、高品質を武器に農産物の輸出が拡大していこう。また、東北の森林面積は全国の約2割で、そのうちの資源循環利用林は全国の4分の1を東北が占めている。この膨大な森林資源を今後適切に管理することによって、温暖化防止への貢献をしながら木材資源の自給率向上、バイオマスエネルギーの供給地域としての展望が開けてくるだろう。いずれにしてもこうした環境や食糧のゆとりは、東北地域の将来を語る場合、重要な意味を持つことになる。

人口減少社会に対してはどうか。東北地域では今後、人口減少、高齢化が急激に進むことは避けられない。人口構造の大変革は、経済産業だけでなく、地域や人々の生活に大きな影を落とし、社会経済システム全般の構造変革を促す。その影響は、当面減少が激しい地方において大きく現われるがその先は、人口集中が進んできた大都市圏域で現われ、激しい変革の中で大都市から産業や人材が地方に分散化する可能性がある。

東北地域は、これまで時間をかけて人口減少に対応してきたことにより、安定した環境を維持しながら変化に柔軟に対応していくことができるだろう。むしろ農村部と一体性をもった都市圏域がバランスよく形成されていくなかで、首都圏などの激変を補う役割を果たしながら、ゆとりある豊かな社会を実現していくことが可能である。

以上概観したことについては、精査を加えていかなければならないが、いずれにせよ将来展望とそれを支える視点で現実社会を見ていくことが、今後ますます強く求められてくるだろう。即ち将来展望とその視点から現状を見直し、そのギャップを課題として捉え、取り組むべきことを明らかにすることが重要である。それは、現状の延長での課題抽出とは異なり、飛躍的な発想を含んだものとなり、飛躍の足がかりとなる。大きな21世紀の潮流のなかで地域が発展していくことは、未来から地域を見ることではじまるのである。

地域が飛躍するといっても、そこには社会全体を動かす大きなエネルギーが必要である。社会全体が共感し、想いを同じにすることで初めてスタートに立てる。地域シンクタンクはそれらに関する情報を提供し、提言を通して社会に問う役割を果たさなくてはならない。

株式会社総合研究所は、今年4月に創立10周年を迎えた。この記念号は、東北地域をどう語るかというミッションを改めて認識しながら、10周年を記念して社内で行ったものである。今後さらに、未来からの提言手法の研究を進め、個性ある豊かな地域社会の実現に貢献していきたいと願っている。